

自閉的特性を強く示す中学生の社会的スキルと学校適応

Social skills and school adjustment in adolescents with autism spectrum

中西 陽¹ 石川信一²

Yo NAKANISHI Shin-ichi ISHIKAWA

要 約

自閉症スペクトラム障害 (Autism Spectrum Disorder ; ASD) においては、社会的コミュニケーションの障害などの自閉的特性によって、子どもの対人関係や社会的適応のつまずきが懸念される。本研究は、公立中学校の通常学級に在籍する自閉的特性の強い子どもの社会的スキルと学校適応の状態を明らかにすることを目的とし、中学1年生223名とその保護者を対象に質問紙調査を実施した。その結果、保護者評定による自閉的特性の強さと自己評定の社会的スキルの低さに関連がみられ、社会的スキルの中でも引込み思案行動や攻撃行動といった対人場面での問題行動の高さとの関連が示された。さらに自閉的特性の高さはストレスや孤独感の高さ、友人からのソーシャルサポートの低さと関連がみられた。次に、スクリーニング基準によって自閉的特性が強いと判断された生徒16名（高特性群）とその他の生徒の中から抽出され、高特性群と性別、学校が一致するマッチングサンプル16名（低特性群）の社会的スキルと学校適応の比較を行った。その結果、社会的スキルには得点の有意差はなかったものの、高特性群のストレス反応や孤独感は有意に高いことが示された。本研究の結果から、自閉的特性を強く示す子どもは通常学級に一定数存在していること、そして彼らは他児と比較して学校不適応に陥る可能性が高いことが明らかになった。

キーワード：自閉症スペクトラム障害，中学生，社会的スキル，学校適応

問題と目的

2013年のDSM-5 (American Psychiatric Association, 2013) の出版に伴い、従来カテゴリーによる診断が行われていた広汎性発達障害 (Pervasive Developmental Disorders ; PDD, 下位診断には、自閉性障害、アスペルガー障害、レット障害、小児期崩壊性障害、特定不

能の広汎性発達障害がある) は、自閉症スペクトラム障害 (Autism Spectrum Disorder ; 以下 ASD) という単一の診断基準にまとめられ、その定義も社会的コミュニケーションの障害、興味の限局と常同的・反復的行動 (Repetitive/restricted behavior ; RRB) という二つにまとめられた (桑原・加藤・佐々木, 2014)。このような自閉的特性は、濃い場合から淡い場合まで連続的に分布するとされており (清水, 2014), わが国の児童・生徒の一般集団においても広く連続的に分布していることが示されている (森脇・小山・神尾, 2011)。

¹ 同志社大学大学院心理学研究科 (Graduate School of Psychology, Doshisha University)

² 同志社大学心理学部 (Faculty of Psychology, Doshisha University)

明らかな知能の遅れがなく、通常学級に在籍している児童生徒においても、社会的コミュニケーションに困難がある場合に、対人関係や社会的適応におけるつまづきが懸念される。漆畑・加藤(2003)は、3名の症例から、知的レベルの高い高機能広汎性発達障害者の多くは、前思春期ないし思春期になると、他者視点をある程度獲得できるようになり、内省力もより深まるようになるため、対人関係上のトラブルで傷つきやすくなることを示唆している。さらにその葛藤やストレスが内省的な方向に向かうと、対人回避傾向や引きこもり、抑うつ症状や強迫症状などへ、一方、外面的な方向に向かうと、他害などの反社会的行動へと二次的に発展することがあることを指摘している。さらに桐山(2006)は、思春期において不登校を呈したアスペルガー障害者7名の症例から、アスペルガー障害の子どもが前思春期に自分と他者の違いに気づき、孤立感や対人関係の緊張を強める可能性を示している。

このように、ASDの診断を受けた多くの子どもの症例から、社会的コミュニケーションの障害によってもたらされる対人関係上のトラブルやそれに伴う様々な不適応が報告されてきている。一方で、このような症例研究は、不適応状態を呈した後に精神科やその他の相談機関を受診した子どもの症例を扱ったものが多く、情報収集の方法も親からの報告によるものが多い。そのため、先の自閉症スペクトラム障害の概念を考慮すると、予防的な観点から通常学級に在籍する自閉的特性を示す子ども(現段階で不登校や引きこもりなどを呈していない子ども)の社会的スキルや学校適応状態の調査や、子ども自身が学校生活のどのような場面で苦痛や困難を感じるのかについて調査する必要性が指摘される。加藤・岡島・吉富・金谷・作田(2011)は、通常学級に在籍する中学生のASD傾向の高さと社会的スキル・学校不適応感・ストレス反応との関連を調査している。その結果、ASD傾向の高さは、友達や教師との関係において積極的に働きかけるスキルの低さ、不適応

感、ストレス反応と関連があり、不登校や心身症、精神疾患のリスク要因であることを推察している。しかし、このような報告は未だ少なく、さらなる知見の集積が求められる。通常学級に在籍する自閉的特性が強く示される子どもの対人関係における行動やコミュニケーションの特徴を明らかにし、彼らの心身状態や友人や教師との関係、学校への適応感を子ども自身の視点から明らかにすることは予防的な支援において有益な示唆を与えるものと考えられる。

そこで、本研究では対人場面で必要とされる技能の行動要素を社会的スキルとしてとらえ、自閉的特性そのものと区別した上で、自閉的特性と社会的スキル、および学校適応についての検討を行うこととした。具体的には、①自閉的特性と社会的スキル、学校適応の関連の検討、②高特性群(自閉的特性を強く示す者)と低特性群の社会的スキル、学校適応の比較を行うことを目的とした。

方 法

参加者

公立中学校2校の通常学級に在籍する1年生223名(男子120名、女子103名)とその保護者が本研究に参加した。

質問紙

保護者は下記の(1)の質問紙、生徒は(2)－(5)の質問紙に回答した。本研究では、(3)－(5)を、学校適応を示す指標として扱った。

1. 対人応答性尺度

(Social Responsiveness Scale ; SRS)

Constantino & Gruber (2005) により開発され、神尾・辻井・稲田・井口・黒田・小山・宇野・奥寺・市川・高木(2009)が日本語版を作成し、森脇他(2011)が日本語版の標準化を行った。4-18歳の子どもの行動特徴を保護者または教師が評価する質問紙で、各項目に対して、「あてはまらない」から「ほとんどいつもあてはまる」の4件法で回答を求める。全65項目

から構成され、得点は粗点を T スコアに換算して用いられる。T スコアが高いほど、自閉的な特性が強いとされる。スクリーニング基準は、Table 1 に示した通りである。また、5 つの下位尺度「対人的気付き」（項目例「人が何を考え、感じているかに気づいている」）、「対人的認知」（項目例「物事を文字どおりに取りすぎて、会話の意味が理解できない」）、「対人的コミュニケーション」（項目例「仲間と、順番にやりとりするのが苦手だ（会話で、聞き手・話し手の役割がわかっていない）」）、「対人的動機付け」（項目例「人といるより、独りでいることを好む」）、「自閉的常同性」（項目例「同じことを何度も何度も繰り返し考えたり話したりする」）から構成されている。子どもの IQ に関わらず、自閉的特性を定量化して把握することができ、ASD の簡便なスクリーニング尺度としての有用性や、臨床閾下となるケースの対人的障害を敏感にとらえ得る可能性が示されている（神尾他，2009）。T スコアの算出方法は下記の通りである。

$$T = (\text{素点} - \text{平均点}) / \text{標準偏差} \times 10 + 50$$

2. 社会的スキル尺度

嶋田（1998）により作成された中学生用社会的スキル尺度を使用した。「向社会的スキル」「引っ込み思案行動」「攻撃行動」の 3 つの下位尺度があり、25 項目から構成される。「全然あてはまらない」から「よくあてはまる」までの 4 件法であり、得点可能範囲は 25－100 点である。得点が高い方が、社会的スキルが高いことを示す。

3. 中学生用メンタルヘルス・チェックリスト

岡安・高山（1999）により作成されたもので、ストレス反応、学校ストレッサー、ソーシャルサポートの 3 領域からなる尺度である。

(a) ストレス反応

ストレス反応は、「身体的反応」「抑うつ・不安」「不機嫌・怒り」「無気力」の 4 つの下位尺度があり、16 項目から構成される。最近

の心や身体の状態について「全くあてはまらない」から「非常にあてはまる」までの 4 件法で回答を求めた。得点可能範囲は 16－64 点である。得点が高い方が、ストレス反応が高いことを示す。

(b) 学校ストレッサー

学校ストレッサーは、「先生との関係」「友人関係」「学業」の 3 つの下位尺度を有し、12 項目から構成される。中学生のストレッサーとなるここ数カ月間の出来事の経験について「全然なかった」から「よくあった」までの 4 件法で回答を求めた。得点可能範囲は、12－48 点である。得点が高い方が、学校ストレッサーの経験が多いことを示す。

(c) ソーシャルサポート

ソーシャルサポートは、「父親」「母親」「担任教師」「友人」の 4 つのサポート源に対し生徒が知覚するソーシャルサポートの程度を測定するもので、それぞれのサポート源に 4 項目の質問がある。本研究では、学校への適応を調べるため、「担任教師」「友人」の 2 つのサポート源（合計 8 項目）に対してのみ測定を行った。「ちがうと思う」から「きっとそうだと思う」の 4 件法で回答を求めた。本研究での得点可能範囲は、8－32 点である。

4. 孤独感尺度

広沢・田中（1984）により作成された異なった関係における孤独感尺度のうち、友人関係下位尺度の 10 項目を使用した。「あてはまらない」から「あてはまる」までの 4 件法であり、得点可能範囲は、10－40 点である。得点が高い方が、孤独感が強いことを示す。

5. 不登校傾向尺度

江村・有倉・岡安（2000）により作成された尺度を使用した。これは、「不登校感情」「不登校傾向」の 2 つの下位尺度があり、6 項目から構成される。「全然なかった」から「よくあった」までの 3 件法であり、得点可能範囲は 6－18 点である。得点が高い方が、不登校傾向が強いことを示す。

倫理的配慮

本研究は、同志社大学心理学部内の倫理委員会から承認を得て実施された。参加者には、参加は任意であり、参加しないことに対して不利益が生じることはなく、調査から得られたデータは個人が特定できない形で分析されることを書面にて説明し、同意が得られた参加者のみを分析対象とした。

高特性群および低特性群のスクリーニング

はじめに自閉的特性が強い子ども(高特性群)をスクリーニングするために、SRSの基準に基

づいて、子どもの性別ごとにSRS合計得点と各下位尺度の素点をTスコアに換算し、群分けを行った(Table 1)。本研究では、ASDが疑われる「ASD-possible群」と「ASD-probable群」の合計16名(男子10名、女子6名)を高特性群とした。自閉的特性が低い生徒と比較を行うために、はじめに「ASD-unlikely群」(111名)の中から、高特性群の生徒と学校、性別が一致する生徒を抽出し、その中から乱数表に基づいて無作為にマッチングサンプルの抽出を行った。マッチングされた16名(男子10名、女子6名)を低特性群として扱った。

Table 1 SRSに基づく群分け

Tスコア	群	基準	N	%
76以上	ASD-possible群	ASD診断との関連が強い	3	2.36
60-75	ASD-probable群	軽い、ないし高機能のASDが疑われる	13	10.24
59以下	ASD-unlikely群	ASDとの関連が低い	111	87.40

分析

- ① SRSとその下位尺度のTスコアと、社会的スキル尺度、ストレス反応、ソーシャルサポート、孤独感とそれぞれの下位尺度の間について、ピアソンの積率相関係数を算出した。
- ② 高特性群、低特性群における社会的スキル、ストレス反応、ソーシャルサポート、孤独感およびそれぞれの下位尺度について、対応のないt検定を行った。

学校ストレス尺度と不登校傾向尺度については、多くの項目において床効果(平均値-標準偏差が、取れる値の最小値未満である(小塩, 2005))が生じていたため、本研究の分析からは除外した。

結 果

自閉的特性と社会的スキル、学校適応の関連

自閉的特性と社会的スキル、学校適応の関連を調査するために有効回答が得られた親子のデー

タを用いた。回答記入漏れが尺度の10%以上に及ぶ場合を分析から除外し、それ以下のものは最頻値の代入を行ったところ、127組の親子が分析対象となった。生徒の性別の内訳は、男子が67名、女子が60名であった。有効回答率は、88.81%であった。

SRSのTスコアおよびその下位尺度得点と社会的スキル、学校適応を示す指標およびその下位尺度得点との間の相関を求めた(Table 2)。その結果、自閉的特性と社会的スキルの間の相関は有意であり、自閉的特性と学校適応におけるストレス反応、ソーシャルサポート、孤独感の全てが有意な相関を示した。このことから、自閉的特性が強い子どもほど社会的スキルの得点は低く、中でも引込み思案行動や攻撃行動が高い傾向にあることが示された。また、自閉的特性が強い子どもほど、ストレス反応、中でも抑うつ・不安、不機嫌・怒り、無気力といった心理面のストレスが高いことが示された。さらに、ソーシャルサポートの中でも友人からのサポートに対する期待が低い傾向がみられた。

Table 2 自閉的特性と社会的スキル，学校適応の相関

	SRS Tスコア	対人的 気づき	対人的 認知	対人的 コミュニケーション	対人的 動機づけ	自閉的 常同性
社会的スキル総得点	-.32**	-.21**	-.13	-.22*	-.31**	-.19**
向社会的スキル	-.16	-.08	-.02	-.05	-.21**	-.02
引っ込み思案行動	.30**	.18*	.13	.25**	.29**	.13
攻撃行動	.19*	.15	.11	.12	.10	.10
ストレス反応総得点	.25**	.15	.25**	.26**	.08	.23**
身体的反応	.12	.16	.17	.15	-.02	.18*
抑うつ・不安	.19*	.14	.15	.20*	-.02	.16
不機嫌・怒り	.24**	.10	.24**	.25**	.13	.16
無気力	.26*	.09	.23**	.26**	.11	.26**
ソーシャルサポート総得点	-.27**	-.24**	-.20**	-.21*	-.11	-.25**
教師からのサポート	-.14	-.23**	-.20*	-.09	.02	-.17
友人からのサポート	-.32**	-.15	-.10	-.27**	-.22*	-.24**
孤独感	.40**	.11	.24**	.38**	.26**	.28**

* $p < .05$, ** $p < .01$

学校適応指標のうち自閉的特性と最も高い相関がみられたのは孤独感であることから、自閉的特性が強い子どもは、孤独感を感じやすいといった傾向が明らかになった。

高特性群と低特性群の社会的スキル，学校適応の比較

はじめに、高特性群と低特性群の SRS の T スコアの比較を行うために対応のない t 検定を

行ったところ、高特性群の平均点68.13点 ($SD = 9.69$) が、低特性群の平均点47.13点 ($SD = 7.05$) より有意に高いことが示された ($t(df) = 7.01(30)$, $p < .000$)。

次に、社会的スキルとその下位尺度、および各学校適応指標とその下位尺度について高特性群と低特性群の間で対応のない t 検定を行った (Table 3)。その結果、ストレス反応において高特性群が低特性群よりも得点が有意に高く、

Table 3 高特性群，低特性群の各尺度の平均点と標準偏差

	高特性群 ($N=16$)		低特性群 ($N=16$)		t
	M	(SD)	M	(SD)	
社会的スキル総得点	78.63	(9.22)	82.25	(6.20)	-1.31
向社会的スキル	30.94	(4.33)	31.06	(3.62)	-0.09
引っ込み思案行動	14.31	(6.33)	12.00	(4.34)	1.21
攻撃行動	13.00	(3.22)	11.81	(3.21)	1.04
ストレス反応総得点	14.81	(12.69)	7.56	(5.29)	2.11*
身体的反応	4.38	(3.76)	2.50	(2.85)	1.59
抑うつ・不安	2.81	(4.05)	1.00	(1.63)	1.66
不機嫌・怒り	4.00	(3.61)	1.13	(2.53)	2.61*
無気力	3.63	(2.99)	2.94	(2.62)	0.69
ソーシャルサポート総得点	13.56	(6.73)	15.63	(6.28)	-0.90
教師からのサポート	6.13	(4.29)	6.38	(4.16)	-0.17
友人からのサポート	7.44	(3.33)	9.25	(3.07)	-1.60
孤独感	20.25	(7.73)	15.31	(3.70)	2.30*

* $p < .05$

下位尺度である不機嫌・怒りにおいても高特性群が低特性群よりも得点が有意に高いことが示された。また、孤独感において、高特性群が低特性群よりも得点が有意に高いことが示された。

考 察

本研究は、自閉的特性と社会的スキル、学校適応の関連の検討、自閉的特性が高い生徒と低い生徒の社会的スキルおよび学校適応の比較を目的としていた。その結果、自閉的特性と社会的スキルおよび学校適応におけるストレス反応、ソーシャルサポート、孤独感との間には有意な相関があることが示された。相関係数の大きさに関しては、自閉的特性を測定する SRS は保護者評定、その他の測定尺度が生徒の自己評定であり、評定者が異なっていることを考慮すると、値は小さいが有意な相関がみられた点で有意な結果であったと考えられる。さらに、高特性群と低特性群の社会的スキルおよび学校適応の比較を行ったところ、ストレス反応とその下位尺度である不機嫌・怒り、そして孤独感において、高特性群が低特性群よりも得点が有意に高いことが示された。

はじめに、SRS の T スコアと社会的スキル得点に有意な負の相関がみられたことから、自閉的特性が強い子どもほど、社会的スキルは低く、中でも引っ込み思案行動や攻撃行動のような問題行動が高い傾向にあることが示された。仲間との関わりにおける行動スキルとして要素に分けると、「友だちに話しかける」「自分から友だちの中に入る」といった積極的な働きかけや関係の形成を行うことを苦手としていたり、「友だちをおどかしたり、いばったりする」「友だちに乱暴な話し方をする」といった攻撃的な行動が高い傾向が示された。

金・細川 (2005) は、発達障害児は仲間に関わりかけることが少なく、相手への働きかけが相互作用へと発展していく頻度も健常児に比べて低いと述べている。また、序論でも述べたように、加藤他 (2011) は、ASD 傾向の高い中学

生は社会的スキルのうち、関係参加スキル、関係向上スキルなど友人や教師へ積極的に働きかけるスキルが低いことを示している。社会的、対人場面での積極性の低さといった点では、本研究においても先行研究と同様の傾向が示された。一方で、加藤他 (2011) の研究では、ASD 傾向と関係の維持を妨げるような行動を制御するスキルとの関連が示されなかったにも関わらず、本研究においては自閉的特性と攻撃行動の間に弱いながらも有意な関連が示された。自閉的特性の強い子どもの問題が、引っ込み思案だけでなく、他者とのトラブルや攻撃行動といった形で表れる可能性もあることが示された。

次に、学校適応指標のうち、ストレス反応、ソーシャルサポート、孤独感において自閉的特性 (SRS の T スコア) との関連がみられたことから、自閉的特性が強い子どもは学校不適応に陥りやすい傾向があることが示された。

自閉的特性を測定する SRS の 5 つの下位尺度の T スコアとその他の尺度の相関をみたところ、とりわけ、自分の気持ちを他者に伝えることや会話のルールを理解、仲間関係の形成などの困難を測定する「社会的コミュニケーション」において、社会的スキル、ストレス反応、ソーシャルサポート、孤独感の多くの下位尺度との間に有意な相関が示された。社会的スキルとは、仲間とのコミュニケーションや対人場面での行動について問うものであるため、SRS における社会的コミュニケーションと相関がみられたのは妥当な結果であったと考えられる。一方で、学校適応に関しても、有意な相関が示されたことは、コミュニケーションに関する苦手さが、心理的なストレスや友人関係における不適応を生じさせる可能性があるということを示す結果であったといえる。

次に、SRS のカットオフ値以上の得点を示す生徒 (高特性群) をスクリーニングしたところ、軽度の ASD が疑われる子どもから診断の可能性が高い子どもまでを合わせると、全体の 12% を超えていることが明らかになった。これは、Kamio, Inada, Moriwaki, Kuroda,

Koyama, Tsujii, Kawakubo, Kuwabara, Tsuchiya, Uno, & Constantino (2012) によるわが国の児童生徒を対象とした小規模疫学調査で示された10.9%という値をやや上回るものであった。したがって、本研究においても、通常学級に在籍している中学生の一般集団において自閉的特性を示す子どもは一定数存在することが明らかになった。

さらに、高特性群と低特性群の社会的スキルおよび学校適応の得点の比較を行ったところ、社会的スキルにおいては、自閉的特性と社会的スキルの関連が示されたにも関わらず、高特性群と低特性群の間に有意な得点差はみられず、先行研究（加藤他，2011）とは一致した結果が得られなかった。この原因として、自閉傾向を測定する尺度や対象者の年齢が先行研究と異なっていたことや、自閉的特性と社会的スキルの評定者が異なっていたことが考えられる。加えて、本研究ではスクリーニングされた高特性群のサンプル数が先行研究と比較して少なかったことなどがあげられる。また、保護者が自閉的特性を高く評定しているが、子どもは自身の社会的スキルをそれほど低く評定していない、あるいは保護者が自閉的特性をそれほど高く評価していないが、子どもが自身の社会的スキルを低く評定しているといった親子間でのずれがあるサンプルが見受けられた。このようなサンプルの存在も群間の社会的スキルに差がみられなかった要因であると考えられる。

関連して、自閉的特性とは、コミュニケーションの問題に限らず、他者の感情や状況の認知、集団参加への動機づけなども含まれており、これらは比較的、時間的経過による変化が期待できない可能性がある構成要素であるのに対し、子ども自身が評定した社会的スキルは、対人場面での行動やふるまい方など介入によって改善が期待できる要素であると考えられる。本研究では、自閉的特性は親評定、社会的スキルについては自己評定において測定されていることから、評定者同一性の問題はないものの、両者についての弁別性や自閉的特性の高い生徒の社会

的スキルの評定方法については検討の余地があるといえる。

学校適応面に関して、加藤他（2011）の先行研究では報告されていないものの、本研究の結果からは、高特性群のストレスは不機嫌や怒りといった形で表れる可能性が示された。そのことから、ASD 児は怒りや攻撃行動などからトラブルになるリスクは低くないと考えられる。さらに、伊勢・十一（2014）は、大学生を対象とした研究で、ASD 傾向の低い大学生と比較して、ASD 傾向の高い大学生（不登校や引きこもりなどの明らかな社会的不適応が生じていない者）の心理的および身体的反応におけるストレス反応が高いことを明らかにしている。この研究結果から、ASD の特性を示す子どものストレスは青年期・成人期まで維持される可能性が指摘できる。今後、自閉的な特性を示す子どもの予防的支援を考えるにあたって、ストレスの低減は念頭に置く必要があるといえる。

次に、自閉的特性の強さと教師からのサポートには関連がなかったのに対して、友人からのサポートの低さや友人関係における孤独感の低さとの間には関連が示され、特に孤独感においては、高特性群が低特性群よりも有意に高かった。これらの結果は、高機能自閉症児の孤独感と友人関係について調査した Bauminger & Kasari (2000) や Nomura, Beppu, & Tsujii (2012) の先行研究の結果と一致している。すなわち ASD 児またはその傾向が示される子どもは、周囲に友だちがいないといった高い孤独感を有していることや援助を必要とする時に友人からの支援を期待できないといった質の低い友人関係を有していることが示唆される。Locke, Ishijima, Kasari, & London (2010) は、ASD をもつ高校生を対象に、彼らの孤独感と友人関係について調査した結果、青年期においても定型発達者と比較して、ASD 者の孤独感は高く、友人関係の質は乏しいことを明らかにしている。このような、不適応の維持やさらなる悪化を予防するためにも早期の治療的支援が求められる。また、孤独感の低減やソーシャ

ルサポートの向上には, 同年代の子どもとの円滑な関係の形成や関わりをサポートするような介入が必要となるだろう。

ASDの社会的スキルの向上や不適応改善を目的とした介入方法としては, 社会的スキル訓練(Social Skills Training; SST)などが一般的である(White, Koenig, & Scahill, 2007)。通常学級に在籍する自閉的特性の高い子どもに対しては, 社会的スキルの向上とともに, 仲間からの受容感の低さや, 孤立感の改善を目指した介入が必要であると考えられる。よって, 自然な環境や仲間との相互作用を利用しながら実施できる通常学級での集団SSTなどが必要になるだろう。

次に本研究の限界について述べる。本研究で使用した学校ストレス尺度, 不登校傾向尺度においては, 床効果が生じたため分析から除外したが, 自閉的特性が高い子どものストレスや学校に対する意識についての調査は今後の課題であるといえる。さらに本研究は保護者と生徒両者から有効回答が得られた親子を分析対象としたためサンプル数が十分に確保できず, また対象児も1学年に限られてしまった。今後はサンプル数を確保し幅広い年齢層の児童生徒を対象に調査を実施する必要があるだろう。

以上をまとめると, 本研究の結果から, 通常学級に在籍する中学生の中に, 軽度ないし高機能のASDが疑われる子どもやASD診断の可能性が高い子どもは一定数存在することが示された。またそのような子どもの自閉的特性は, 社会的スキルや, ストレス, ソーシャルサポート, 孤独感などと相関関係にあり, 特に, 自閉的特性を強く示す場合に, 学校不適応に陥る可能性が高いことが示唆された。本研究の結果より, 通常学級に在籍するASD児またその特性が高い子どもに対する支援の指針が示唆された。

引用文献

American Psychiatric Association (2013).
Diagnostic and Statistical Manual of

Mental Disorders, Fifth edition, DSM-5. Washington D. C.: American Psychiatric Association.

Bauminger, N., & Kasari, C. (2000). Loneliness and friendship in high-functioning children with autism. *Child Development, 71*, 447-456.

Constantino, J. N., & Gruber, C. P. (2005). *Social responsiveness scale manual.* Los Angeles: Western Psychological Services.

江村理奈・有倉巳幸・岡安孝弘 (2000). 中学生の不登校傾向と適応状態 日本教育心理学会第42回総会発表論文集, 677.

広沢俊宗・田中國夫 (1984). 異なった関係における孤独感尺度の構成 関西大学社会学部紀要, 49, 127-136.

伊勢由佳利・十一元三 (2014). 自閉症スペクトラム障害およびその傾向をもつ成人における不安を中心とした心身状態とストレスに関する研究 児童青年精神医学とその近接領域, 55, 173-188.

Kamio, Y., Inada, N., Moriwaki, A., Kuroda, M., Koyama, T., Tsujii, H., Kawakubo, H., Kuwabara, K., Tsuchiya, J., Uno, Y., & Constantino, J. N. (2013). Quantitative autistic traits ascertained in a national survey of 22 529 Japanese schoolchildren. *Acta Psychiatrica Scandinavica, 128*, 45-53.

神尾陽子・辻井弘美・稲田尚子・井口英子・黒田美保・小山智典・宇野洋太・奥寺崇・市川宏伸・高木晶子 (2009). 対人応答性尺度(Social Responsiveness Scale; SRS)日本語版の妥当性検証—広汎性発達障害日本自閉症協会評定尺度(PDD-Autism Society Japan Rating Scales; PARS)との比較— 精神医学, 51, 1101-1109.

加藤典子・岡島純子・吉富裕子・金谷梨恵・作田亮一 (2011). 通常学級に在籍する中学生の自閉症スペクトラム傾向の高さと社会

- 的スキル・学校不適応感・ストレス反応との関連 日本行動療法学会第37回大会発表論文集, 360-361.
- 金彦志・細川徹 (2005). 発達障害児における社会的相互作用に関する研究動向—学童期の仲間関係を中心に— 東北大学大学院教育学研究科年報, **53**, 239-251.
- 桐山正成 (2006). 思春期において不登校を呈した7例のアスペルガー障害の臨床的特徴 川崎医学会誌, **32**, 111-125.
- 桑原斉・加藤佳代子・佐々木司 (2014). DSM-5における「自閉症スペクトラム」—何がどう変わったか?— ころの科学, **174**, 22-28.
- Locke, J., Ishijima, H. E., Kasari, C., & London, N. (2010). Loneliness, friendship quality and the social networks of adolescents with high-functioning autism in an inclusive school setting. *Journal of Research in Special Educational Needs*, **10**, 74-81.
- 森脇愛子・小山智典・神尾陽子 (2011). 一般児童における発達障害の有病率と関連要因に関する研究② 対人応答性尺度 (Social Responsiveness Scale: SRS) の標準化 1歳からの広汎性発達障害の出現とその発達の变化: 地域ベースの横断的および縦断的研究 平成22年度 総括・分担研究報告書 国立精神・神経医療研究センター, 49-68.
- Nomura, K., Beppu, S., & Tsujii, M. (2012). Loneliness in children with high functioning pervasive developmental disorders. *The Japanese journal of special education*, **49**, 645-656.
- 岡安孝弘・高山巖 (1999). 中学生用メンタルヘルス・チェックリスト (簡易版) の作成 宮崎大学教育学部教育実践研究指導センター研究紀要, **6**, 73-84.
- 小塩真司 (2005). 研究事例で学ぶ SPSS と Amos による心理・調査データ解析 東京図書株式会社
- 嶋田洋徳 (1998). 小中学生の心理的ストレスと学校適応に関する研究 風間書房
- 清水康夫 (2014). 自閉症スペクトラムとは? ころの科学, **174**, 10-14.
- 漆畑輝映・加藤義男 (2003). 思春期高機能広汎性発達障害者の学校不適応について 岩手大学教育学部附属教育学実践総合センター研究紀要, **2**, 191-201.
- White, S. W., Koenig, K., & Scahill, L. (2007). Social skills development in children with autism spectrum disorders: A review of the intervention research. *Journal of Autism & Developmental Disorders*, **37**, 1858-1868.

